犯罪防止における構成期待再構成の重要性とその方法[1)]

石　井　　徹*

Importance and the method of reconstruction of “constitutive expectancy” in crime preventing.

Tooru Ishii

要　約

本稿ではまず私たちの騙されやすさを心理学と社会学の知見をもとに描いた。その後、悪意を警戒する一つの方法を提案した。心理学は決して机上の空論ではない。日常生活に根ざした実学である。しかし多くの人々の認識はそうではないように見える。本稿は、社会学の力も借りつつ、知覚心理学や学習心理学、社会心理学が私たちの日常と実際に深く関わっていることを示そうとする一つの試みである。

キーワード：条件づけ、社会的認知、構成期待、赤信号システム、犯罪防止.

abstract

In this article, we drew first the fact that we are easy to be swindled on the basis of the knowledge of psychology and sociology. After that we proposed one method of being cautious the invasion of malice. Psychology is not theoretical empty theory. It is the practical science which is rooted in daily life. But recognition of many people seems as so not been. This article, while borrowing the findings in sociology, is one attempt which it tries to show the fact that perceptual psychology, psychology of learning and social psychology have really related with our every day deeply.

keywords: conditioning, social perception, constitutive expectancy, red signal system, crime preventing.

本稿では通称「オレオレ詐欺」などの詐欺犯罪防止について心理学と社会学がかかわれる知見を検討する。まず「人はなぜ騙されるのか」という問いかけへの回答から出発して、これまで主に経験的に行われてきた犯罪や事故の防止法の合理性を構成期待（constitutive expectancy, Garfinkel, 1963）をキーワードとして再確認し、今後への提言を行う。

*島根大学法文学部

「人はなぜ騙されるのか」という問いかけ

この問いには「私たちはそんなに騙されない」という前提がある。「ふつうなら」、「いつもなら」、「うっかりしていなければ」などと付く。しかしそれは誤解である。「ふつうに」、「いつもの通り」、「しっかりして」いる日常生活の中で、すでに私たちは互いに騙し騙されている。

そのつもりがないのは騙し騙されていることを忘れているからである。忘れておれるのは生活のほとんどを善意の中で過ごせていることが基礎になっている。このことは、たまに判明した悪意がとても目立つことと表と裏の関係にある。

また私たちは、互いに騙し騙されることで人情豊かで喜怒哀楽に富んだ、そして健やかな生活を営むことができている。小説やドラマなどでたまに戯画化して描かれる「冷静」で「合理的」な人物がどれだけ穏やかな日常生活を乱す存在になるか、その例は豊富であろう。さらに加齢や様々な経験、あるいは障害によって、それまでのようには「騙されなくなった」人は、周囲の人々から浮き上がり、望むと望まざるとにかかわらず注目を集め、見守りの必要な人となる。

本稿の前半では、私たちの日常生活がこのようにお互いの騙し合いを基礎とし、常としていることについて、以下その詳細を個人のしくみ、人間関係、社会における個人という視点から順に見てゆく。

騙されやすくできている：周囲の世界を知覚し認知するしくみ

まず私たちは誰もが、元来、騙されるようにできていることから確かめる。進化論の考え方に則って、騙されやすい遺伝子が生き残ってきたと考えてもよい。まず私たちの五感を含む知覚系が事実をそのままとらえていないこと、事実にはない物事を認知していることを検討する。さらにその認知の仕方まで他者から学び、あわせようとしていることを確認する。

①主観的輪郭線と奥行き知覚

私たちの五感は物理的に存在しているものはもとより、存在しないものも感じ取る。単に感じ取るだけではなく、存在するものとして扱う。また逆に存在しないものだけではなく、存在しているものまで感じない。したがってないものとして扱う。このような現象は知覚心理学や認知心理学のみならず心理学全体の出発点と考えられる。他の生物や動物はともかく、少なくとも人のもっとも不思議な特徴である。

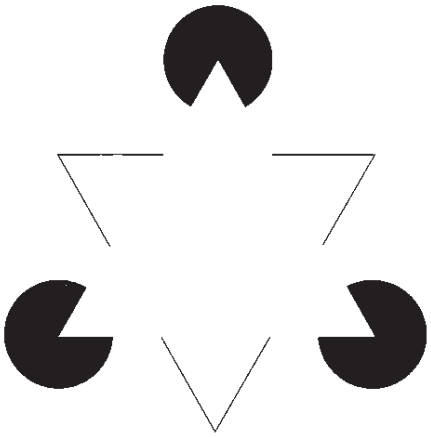


図１　Kanizsa（1976）の主観的輪郭線

まず前者の例として「主観的輪郭線」と「奥行き知覚」を挙げる。図１はKanizsaの三角形と呼ばれる図形である（Kanizsa, 1976）。ほとんどの人が図の中央に「白い」三角形を見る。物理的には存在しない輪郭線を主観的に見る、という意味でこれを主観的輪郭線と呼ぶ。な

ぜ見えるのかというしくみについては複数の説が挙げられている。ここでは「ゲシュタルト心理学」からの説明を紹介する。

ゲシュタルト（Gestalt）とはドイツ語で「形」や「まとまり」を表す日常の言葉である。20 世紀初頭、私たちが「形」や「まとまり」を見て取るしくみを精力的に調べた心理学者の一派を心理学では「ゲシュタルト心理学」者と呼んでいる。そこで明らかにされた数々の「ゲシュタルトの法則」は、「まとまり（群化）の法則」として現在の多くの心理学分野の基礎になっている。「近接の要因」や「類同の要因」などの法則が示すのは、人は事情の許す限り眼前の刺激を少しでも単純で明快な方へ知覚しようとするという点である。筆者はこれを「まとめよう」とする、とまとめている。Kanizsa の三角形では、2 種 6 個の図形がそれぞれ異なった方向を向いて置いてあると見るよりも、黒い丸 3 つと黒い輪郭線の三角形一つ、そしてもう一つ、輪郭の描いていない三角形と見た方がまとまりがよい、ということになる。このとき輪郭のない三角形はその他の図形の上に浮いて見えることも見ておきたい。平面にもかかわらず私たちはここに奥行きも見ている。すなわち「まとめる」ために私たちは、物理的には存在しない輪郭線と奥行きを主観的に付け足している。

図 2　奥行き知覚の例：松江市内

これらは図 1 のような特別な図形だから起こる現象ではない。日常生活において私たちは図 2 の写真（筆者撮影）のように、ごくふつうに奥行きを感じ取っている。図 2 の道路上に描かれた模様は自動車の運転者から見ると路上に置かれたブロックに見えるように、すなわち立体的に見えるように描かれている。歩道側に描かれた模様と中央線よりに描かれた模様は同じであるにもかかわらず、歩道側は車道に向かって斜めに、中央側は車道に向かって切り立って見えるようになっている。運転者はこれらの「ブロック」に触れないように車線の真ん中を進むように促されることになる。このような立体的に見える路上の絵は、心理学の効果的な応用例として今後も適切な活用が期待される。

加えて、何よりも平面的な写真であるにもかかわらず、私たちのほとんどはこの写真に手前からはるか向こうに広がる奥行きのある道路を見て取る。どれも物理的には存在しない奥行きを主観的に自ら補っている。自ら進んでうまく騙されていることの一例と言いうる。

次に「存在するのに感じない」例として、奇術と視線の移動を挙げる。娯楽の雄としての奇術は時に種明かしをされることがある。驚くのは、奇術の種の多くが見ている者の眼前で堂々と行われていることである。私たちの五感は見事に騙され、そして楽しまされている。同様のしくみは、日常的には例えば視線を移動するときに「自発的に」多く使われている。単純に右から左に視線を移動する際、特に意識しない限り、私たちは右から左へ移す途中の景色を「見ないで」いる。

②洞察学習：目的と手段の隠れた関係

図 3 は先に述べたゲシュタルト心理学者の一人ケーラーが示したチンパンジーの洞察学習（Köhler, 1917）の様子を写真と図で示した

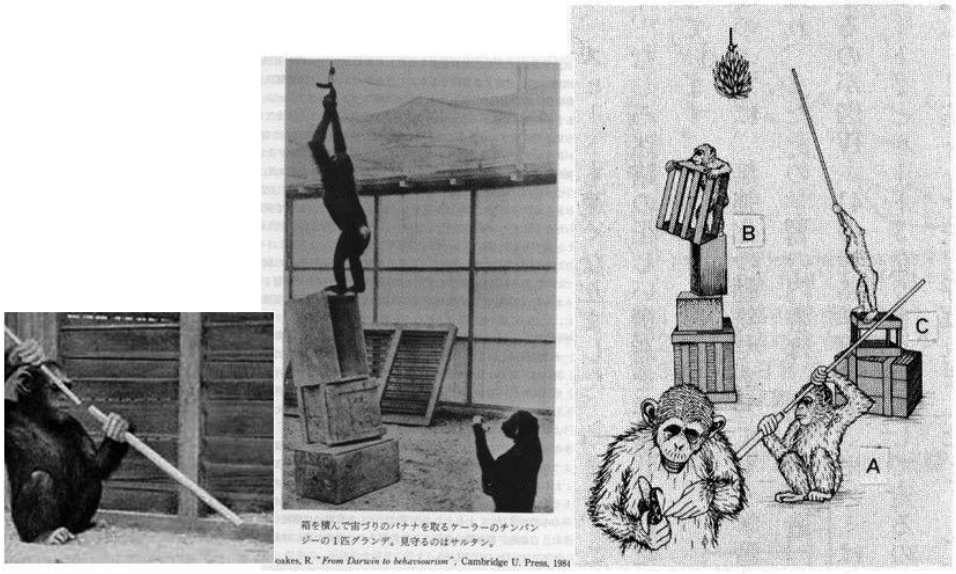


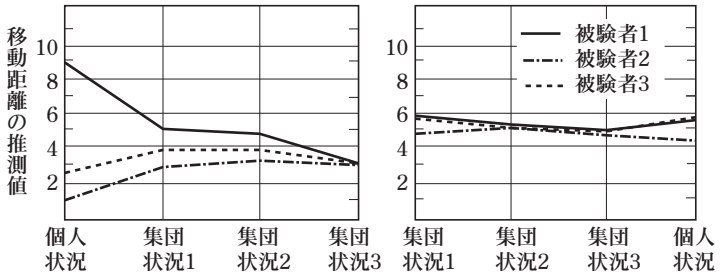
図3　チンパンジーの知恵実験の図版集

ものである。天井からぶら下げられたバナナを手に入れるべく、私たち霊長類はあの手この手を考えながら試す。図3で注目すべきは目的と手段との間の具体的には見えない隠れた関係が、行為者（チンパンジー）に見えている点である。主観的輪郭線の延長に考えてよい現象である。最近では霊長類以外にも道具を使う動物が報告されているものの、さらに重要なのは、多くの「賢い」動物たちのように一度うまくいった方法をやみくもに繰り返すのではなく、この図の行為者には状況の変化に応じた手段の変化が見えていることである。状況に応じて箱を積む、棒を継ぎ足す、あるいは実験を終えるために天井のバナナを回収しようとした実験者をも、とっさの判断で道具（はしご）として用い、目的のバナナを手に入れる。

この例は「見える」ことに、バナナとの距離、箱の数、使えそうな棒の数などといった、眼前に見えている刺激およびその刺激の配置のような状況の要因だけではなく、経験や知識そして文字通り洞察力といった内的な要因も重要な役割を果たしていることを示している。知らないと見えないことがある例である。そしてそれは同時に経験や知識の内容によって見える内容や聞こえる内容も異なることを示している。日頃家族との電話が主な人であれば、かかってきた電話の声は、家族の誰かに聞こえる可能性が高くなる。そこに悪意があれば詐欺と呼ばれることになる。しかし、悪意がなければいちいち名乗る手間を省けるとても効率のよい応対ができる。時には愉快な間違いとして笑い話の一つにもなろう。

③規範の生成と維持：見え方・感じ方の同調、M. Sherif の実験

図4はSherif（1935）の実験結果を模式的に示した表である。この実験では参加者は暗室に入って壁に取り付けられた光点を見つめるように指示された。主に眼球の微動のせいで暗闇では私たちは固定された光点も動いてい



(a) 個人状況から集団状況へ　　(b) 集団状況から個人状況へ

図 4　光点の自動運動現象に見る規範の生成と維持

るように見えてしまう。Sherif は、自動運動と呼ばれるこの現象を利用した。参加者はまず一人ずつ個別に暗室に入り、光点が動く様子を「見えたまま」レポートするよう求められる。発言はそのまま録音され平均値として示されたのが左の表のもっとも左の各点である。一目でわかるように個人差が大きい。

しかし左から 2 列目、1 列目の 3 人が同時に部屋にはいると移動距離の平均値が少し近付いてきた。集団状況 1 から集団状況 3 へと、同時にはいることを繰り返すにつれて平均値がほぼ一致してしまったのである。同室の事態において参加者たちは他者の声は無視するように教示されているにもかかわらず、左の表のもっとも右側の列に示されるように移動距離の見積もり方がほぼ一致してしまった。同調という用語は社会心理学においてふつうは意見の一致について用いられるが、このような感覚の一致においても見られる現象であることを Sherif の実験は示したのである。おまけに右の表の右端に示されるようにその直前までに同調した「見え方」は再度一人の状況に戻ってもなお維持された。一致したことも維持したことも参加者は実験がすべて終了するまで何も知らされていなかったことも付記しておかなければならない。もともと動いていないものが動いて見えるばかりか、その見え方について他者と互いにあわせてしまい、一人になった後もその見え方が（それと知らぬ間に）残っている。

④文脈の読み方：ケース・バイ・ケースの教え

図 5 の中央の図形は、たてにみれば数字の 13 に、横に見ればアルファベットの B に「読む」人がほとんどと思われる。ともに 13 という数字と B というアルファベットを知っている人たちである。たて棒とたての波形の組み合わせは同じなのに、文脈によって、しかもその文脈を知っていることによって異なる「意味」を私たちは「見て取る」。どうしてこの組

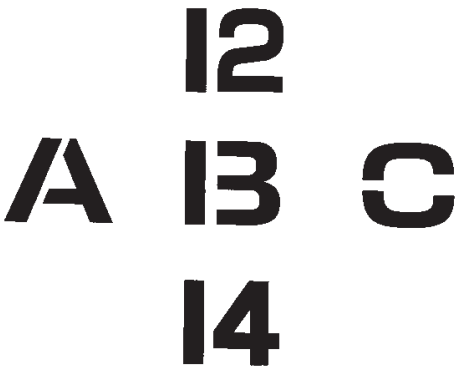


図 5　文脈の効果

み合わせ（たて棒とたての波形）が13であり、Bなのかは次に譲ることにして、ここで重要なのは、文脈にあわせてそれにふさわしく読み取りなさいよ、と私たちは周りから言われ、従っている点である。中学生以上の人であれば、たてに見たときにB、横に見たときに13と読む人はまずいないであろう。日常的な表現に置き換えれば「察しなさい」と言われて従っている場面である。13もBもともに物理的には存在しない（存在するのはたて棒とたての波形）ので、文字通り騙され方を指示され、その指示に従って騙されていることになる。もう一つ見ておくべきはこれを私たちはほぼ自然に、そして自発的に行っている点である。

困ったことに、逆にこれらのことができないと「空気が読めない」、「察しが悪い」と言って周囲の人から非難されてしまう。「察しなさい」という周囲の人の、しかも無言の圧力が露わになる瞬間である。つまり私たちは、自分一人で見ているつもりでも、実は周囲の人から「同じ見方で」一緒に見るよう不断に促されている。

理由は一つ、ともに暮らすためである。ともに暮らすことで私たちはずいぶん多くの労力を節約できている。しかしその分、ずいぶん多くの合意や約束事に縛られている。縛られるだけではなく、となりの他者に対して同じように縛ろうとしている。縛られていることには時々気づくけれど、縛っていることについてはほとんど気づかない。次にこの点を少し詳しく見てみよう。

こんなふうに騙されなさい：社会的学習過程　意味の共有

①夕焼けの色：間主観性

残念ながら現代の科学では、隣同士に立って同じ夕焼けを見ている時にも横にいる人と同じ色を見ているかどうか、手軽に確かめるすべを私たちは持っていない。にもかかわらず私たちは同じ色を同じように見ていることを前提として会話を行っている。

社会学者A. Shutz（1945）はこの問題を「間主観性」という概念で説明した。共通体験と「赤」という言葉によって私たちは夕焼けの色（主観）を共有している。このとき言葉は体験の共有に対する「同意」を示す合図になっていると言うことができる。誕生時を含めて私たちが様々な人の社会にはいるとき、そこにはすでに先人がいる。吉田兼好が「徒然草」で「先達」と呼んだ人である。新しく入った社会によってはその人が年下であることも希ではない。幼子や新入生に新入社員、新しい家族などにその場の「色」を共有するようもとめる作業は日々至る所に絶えず見ることができる。

②条件付け：価値・行動様式の継承

特に五感にかかわる出来事について体験の共有を促すとき、相手がすでに持っている「快」の感覚を利用する、というとても単純な方法を広く知らしめたのはロシアの神経学者、I. Pavlov（1927）である。「パブロフの犬」というあだ名で呼ばれることの多い古典的条件付けは、相手がもともと持っている「快」の感覚と「合意を得たい出来事」を同時に、しかも繰り返し呈示することで、それまで何とも思わなかった物事が新たに「快」になることを示した。かくて夕暮れ時の風呂上がりに見た「夕焼けの景色」は「気持ちいいきれいな」景色になり、いつのまにか「懐かしい」景色にもなった。懐かしい味に顕著に見て取ることができるように、味そのものには決して含まれない「懐かしさ」をも私たちは感じ取る（味わう）ことができる。そして

その「懐かしさ」をもとなりの人と共有することができる。

また同じく「快」の感覚を用いて行動が形作られてゆく過程を活写したのが、アメリカの行動主義心理学者 B. F. Skinner（1938）である。試行錯誤の結果うまくいった方法は私たちの経験に残りうまく行かなかった方法は消える、という「効果の法則」を見いだした E. L. Thorndike（1911）の研究をもとに、スキナーは「うまくゆく（望ましい）」行動と「うまくゆかない（望ましくない）」行動をあらかじめ決めておくことにした。相手の行動の中で「望ましい行為」は強化し「望ましくない行為」は消去する、その際「ご褒美」や「罰」といった「道具（強化子）」を用いることからこのしくみは「道具的条件付け」と呼ばれている。「ご褒美」は「快」の源であり、「罰」はその逆の「不快」の源である。人同士の場合、言葉はもとよりちょっとした仕草や視線の動きまでもが、時に「ご褒美」になったり「罰」になったりする。私たちはこれをうまく使い分けることで目の前の他者に「正しい」行動や「適切な」行動をさせようとしている。逆に私たち自身がそのようにさせられていることも事実である。五十年や百年といった長い目で見れば日々の振る舞い方は変わっているかもしれないけれど、比較的短い期間に限定すれば、私たちの歩き方やあいさつの仕方、箸の持ち方から話し方などはほぼ一定に保たれている。そこから外れようとする度に周りから誰かが、視線や合図、仕草あるいは言葉で「注意」してくれる。「ほめられる」こともあるかもしれないが、成人になればなるほど幼少時ほど頻繁にはほめられなくなっているであろう。

これら条件付けの研究で忘れてはならないのは、「先達」の恣意性である。元来の「快」を何に条件付けるのか、どの行為を「望ましい」とするのかは条件付ける側の任意であり、条件付けられる側が自分で選択するのはほとんど困難なことである。換言すれば私たちは、ほとんど何も考えないうちに夕日はきれいだと感じ、今の歩き方が正しいと感じるようになってしまった。朝日がさほど注目されない理由、江戸時代の歩き方などを考えてみるならば、これらが決して唯一の「真実」ではないことは容易にわかる。そしてさらに私たちはそれを次の世代を含めた周囲の人たちに再び条件付けようとしている。

③騙し合いの日常：

構成期待　あいさつの不思議

私たちがこのように感覚を揃え、価値観を揃え、行動を揃えるのは先にも述べたとおり、ともに暮らしてゆく上でのロスを少なくするためである。日常生活でも頻繁に経験するようにふつうに仲のよいことがもっともエコなのである。たとえそれが幼い子の兄弟げんかであっても、本人たちも周囲の大人も、仲良くしていたならしなくてもよかったはずのことをたくさんしなければならなくなる。いつもの通学路を「のほほんと」歩けなくなったときにどれだけ荷物が増えるか、どれだけ余計な通学時間がかかるか、その原因が仮に夜勤帰りのご近所を不審者と間違えた場合であったとしても容易に想像されるであろう。特別に仲がよいのではなく、ふつうに仲のよいのがベストなのである。

アメリカの社会学者 H. Garfinkel（1963）はその社会の一員であろうとする気持ちを「構成期待（constitutive expectancy）」と呼んだ。そして互いに構成期待を持っていることを信頼できる状態でこそ、なめらかで調和のとれた社会が続くことを理論的推論とそれに基づく実験によって明らかにした。ここで「構成

期待」を紹介するのは、これが他者へ向かって、感覚を揃え、価値観を揃え、行動を揃えるように求めることの唯一の正当性を与えると考えるからである。つまり「あなたも私と同じように今いるこの社会の一員だし、一緒にこの社会を維持しよう（構成しよう）としてるでしょう。だったら夕日の赤はきれいで、冬はお鍋がおいしいと感じて欲しいし、歩くときは手足を交互に動かしましょうね」と要請できるのである。

この要請にはもちろん例えば「お鍋」という言葉の意味を正しく理解することも含まれている。「冬のお鍋」という表現で、コンロの上でぐつぐつ煮えている土鍋の中身をみんなでお箸でつまんで小皿に移して食べている情景を思い浮かべて欲しい、という、より細かな要請もここに入っている。どう見ても同じ日本人なのに、そしてもののわかっているはずの成人なのに「冬であろうが夏であろうが、お鍋なんて食べたら歯が折れる」などという相手に対して私たちは「変な人」という呼び方をする。「変な人」と呼ばれる回数が増えるにつれてその人の周りから人が少なくなることが多い。加齢のせい、あるいは何かの疾患のせいという明確な理由がみつからなければ、その「変人」の近くで生活している人ほど困惑することになる。

翻って、引っ越してきたばかりの町内を考えてみれば、周囲の人たちの感じ方や価値観、行動様式などをほぼ一から学ばなければならない状態であることは容易に理解されよう。学ぶ際には「新しくきたけれどもこの町内の一員になりたいと思っています」と構成期待をむしろあからさまに示すことが必要になる。迎え入れる町内から見れば、新参者は「どこの馬の骨かわからない」分だけ「変人」の可能性が高くなる。

その社会で共に生活している人たちに対して、感覚を揃え、価値観を揃え、行動を揃えるよう求めるのは日本だけの話ではない。その具体的な内容が異なるだけで、洋の東西を問わず、時代の古今を問わず、そこに社会がある限りいつもあったし、これからも必要なことと思われる。恋人であれ、家族であれ、町内や自治体、国家間においても、そこに少しでも相互依存関係があれば、互いに最少のコストで最大の効果を得るためには互いの構成期待に対する信頼が不可欠と考える。逆説的に見れば友人との不仲から国家間の紛争に至るまで現存するものを吟味するとき、必ずそこに構成期待の不一致や内容の齟齬を見いだすことができよう。旧約聖書第11章「創世記」の「バベルの塔」のエピソードが描かれたときには、すでにこの可能性は実感されていた。また些細な誤解から相互期待への信頼が崩れ、疑心暗鬼から破局に変わってゆく過程は、これもすでに、例えばシェイクスピアの「オセロ」に活写されている。

日常において他者に対してあからさまに構成期待を要請したり、あるいは確認したりすることは希だと思われる。しかし構成期待に描かれた内容である「常識」が破られたとき、すなわち「非常識」に出会ったとき、私たちは結構敏感に反応する。その場を即座に離れるか、それができない場合には常識に戻そうとする。うっかり上座に座ってしまった新入生には、上座と下座の区別から説き起こして下座に移らせることになる。上下は概念上のことであり、実在する何かではないのに、実在するつもりになるよう要請するのである。悪意はないものの「そのつもりになりなさい」という点では「騙されなさい」というに等しい。あるいは説明する側が「構成期待」という概念を知らなければ、「ホラこっちが上座

で、下座はこっち。どうしてそれが見えないの」と、事実として詰問することにもなろう。された側は「見えないものは見えない」と言い張るしかないかもしれない。

いずれにせよ私たちはこのように日常的に互いの常識を確認し、構成期待を維持しようと互いに見張り合い、圧力を掛け合っている。その典型は日々のあいさつである。会話としては大して意味のないやりとりだが、互いに「今日も常識人ですよね」と確認し合っている。先の引っ越しなどの場合、町内の人たちと「ふつうに」あいさつを交わせるようになれば「一人前」になる。

あいさつをしないのがあいさつという地域や場合もあるかもしれない。その場合でも、互いの存在をそれとなく確認し合っていることは、何か異常が起きた時に確認できるはずである。「アイヒマン実験」で有名なS. Milgram（1972）は、日々同じ時刻に同じ駅を利用する通勤客へのインタビューを通じて「おなじみの他人（familiar strangers）」という「社会」を紹介した。電車を待つ間、互いに見知らぬ同士の通勤客たちは、特にあいさつも言葉も交わしたわけではないのに、いつも同じ顔がほぼ同じ位置にいることを互いに確認し合っていた。そしていつもの顔が見えないときには不安を感じ、戻ってきたときには安堵する、という回答を多くの人が寄せた。駅のホームにも確認し合い、維持し合う構成期待が、目には見えないものの存在する。

物理的には存在しない虚構を見聞きしたり、互いの主観を例えば「言葉」によって合意したり、さらにはその合意を次の他者に要請したりすることは、一見するととても理不尽で強引な行為に見えるかもしれない。しかし身近な、様々な虚構を認め維持することによって、私たちは生活に豊かな彩りを得ている。食事は単に栄養を摂取する行為にとどまらず、その場の雰囲気とともに喜びや元気、希望までも与えてくれる行為なのである。このような日々の小さな虚構の積み重ねが文化や哲学あるいは信仰となって、逆に私たちを導いていることも忘れてはならないであろう。

このように考えてくるならば、詐欺との違いは、常識や構成期待の維持には正当性があり悪意がないという点に絞られる。特別に善意である必要はない。ふつうで充分なのである。また、正当性を偽ることも悪意に含めるならば、構成期待の維持と強制は悪意の有無だけが詐欺との違いとなる。

詐欺：わずかな悪意

先の「上下」をわきまえた人が一見しただけでは上下のわからない場に出くわしたとき、「こちらが上座です」と教えてあげる場合を考えてみる。あからさまに言っては失礼なのでさりげなく「こちらの方がよろしいかと（存じます）」と曖昧な表現をすることが多い。それで相手が正しく「察して」くれればめでたしめでたしである。私たちの日常は、ほとんどがこのような曖昧な表現で運んでいる。あからさまな指摘や明確な指摘はかえってその信頼を疑っていることの表明にもなる。曖昧なままで事なきを得ているのは構成期待に対する互いの信頼が基礎にある。

しかし曖昧だから悪意も善意も紛れ込みやすいことになる。わずかな悪意が紛れ込むとき「詐欺」になる。わずかな善意（サービス精神）であれば「奇術」のような娯楽になる。わずかだから、まず、その存在に気づきにくい。日常の善意や信頼に隠れてしまう。だれもが「私に限って、ぜったい大丈夫」とか「この町内でそんな事件は起きるはずがない」と思っている。さらに悪意の場合も善意の場合

も、その一点をのぞいて残りすべてが「まっとうな」常識に則って運ぶため目標が達成される可能性が高くなる。

詐欺を仕掛ける側からは、できる限りわずかにすることで、気づきにくくするとともに、コストパフォーマンスを少しでもよくしたいという気持ちもある。騙される側の日常が善意や信頼にあふれていることも、さりげない悪意を隠すのに好都合である。成功させたい詐欺であればあるほど紛れ込ませる悪意は、小さく、ささやかなものになる。騙される側からはますます見つけにくくなり、騙されやすくなる。

つまり「騙されない」ためには日常に紛れ込んでくるささやかな悪意を見つければよいことになる。しかし先述の通りささやかであるために見つけにくいのも事実である。さらに「人を見たら泥棒と思え」とは誰も言えないし、言われても誰も実行できないであろう。無理にでも実行すれば、文字通り「おちおち外を歩けなく」なりすぐに生活ができなくなってしまう。この袋小路に対して私たちは、手本とすべき「警戒システム」をすでに持っている。

お手本としての「赤信号」：一人で無理ならみんなで見つける

それは交通システムにおける赤信号である。赤信号に関するシステムは次の4点においてとても優れている。第1に「赤色」というもっとも単純な刺激と特定の行為を結びつけたことである。四の五の言わずに赤い札を見せるだけで意図が伝わる。第2に要請される行為は「用心する」という一点であり、むやみに押しとどめるような強引さや迂回路を考えるなどの複雑さを一切排除していることである。ほどほどに柔軟で単純だから幼児にでも教えることができる。第3に広く世界的に認知されていることである。誰かがたまたまそのとき忘れていても、ほぼ必ず周りの誰かが知っていて、教えてくれる。第4に「赤信号」なら仕方がないね、とまで言うほどの強い説得力を得ている。以下もう少し詳しく見てみよう。

まず第1に、赤信号に出会ったらとりあえず立ち止まり周囲を警戒する、というのは明らかに人為的な約束事である。赤い色とその後の行為との間には何の必然性もない。それにもかかわらずこの約束事一つで、日本のみならず世界各地でどれだけ交通事故が減っているかは改めて実感されるべきである。いろいろな理由で信号システムが作動しなくなったときの惨状を想像するだけでもその片鱗は実感できる。内容の単純さと比較するときその優秀さがさらに実感できる。

赤信号が優れていることの第2点は、それが「とりあえず用心しなさい」とだけ言っていることである。「すぐに引き返しなさい」とは言っていない。赤信号すなわち危険という図式ではなく、赤信号で一端用心、一端立ち止まって充分に安全を確認しようという合図である。単純で柔軟だから逆に問答無用が可能になる。「何をしていても」、「どんなときでも」、「一端立ち止まって充分に安全を確認しなさい」と言える。

詐欺との比較においては、おそらくこの問答無用に立ち止まらせる点が最も重要になろう。奇術においても詐欺においても要点の一つは流れに「乗せる」ことにある。あるいは日々の会話でも同じく、流れに乗ってしまえば、後で冷静になって「何で？」と思うことでも充分に楽しめてしまう。詐欺の場合なら仕掛ける側は、マジシャンと同じく、とにかく自分のペースに乗せようとする。

これに対して赤信号は事情を問わずとりあ

えず立ち止まらせる。確認して大丈夫ならあらためて進めばよい。大丈夫でなければしかるべく対処することになる。

第３と第４の点は要するに赤信号のしくみが構成期待の一部として多くの人々の常識になってしまっていることの利点である。仮に何かの事情で私が赤信号を無視しても周りの誰かが引き留めてくれる。あるいは引き留めようとしてくれる。集団的な用心は、時にお節介であり時に迷惑であるが、これについては本人もまた引き留められて当然、仕方ないと思っている。どんなに急いでいてやむを得ない事情があっても、結果的に安全だったとしても、結果的にみんなに迷惑をかけていなくても、さらに万が一迷惑をかけていても、赤信号を無視するのはやはりよくない、というところまでこのシステムは浸透している。ここまで文章化し客観視して初めて「なぜ？」と気づくくらい、赤信号無視は「よくないこと」になっている。理屈っぽく言えば、みんながそのように合意しているから（無視しては）いけない、ということになるが、「そんなの私は知らないよ」と言われそうな場面でもある。構成期待の弱点である。ともかく、仮に私が気づかなくても、みんなが、あるいは誰かが必ず赤信号を見つけ知らせてくれる、そして私もそれを納得している。さらに立ち止まった結果大切な用事に遅れたとしても「赤信号で」と言えばけっこう納得して許してもらえるのである。

再び構成期待：悪意の可能性の発見

私たちが元来騙されやすくできていて、騙し合うことによって今の生活をむしろ満喫している限り、そしてそこへ紛れ込む悪意がわずかでとても見分けにくい状況では、（悪意に）騙されない、というのはどう考えても不可能に見える。少なくとも一人では不可能であろう。したがって大勢で、しかも騙されないのではなく、用心するのがもっとも現実的な方法と考える。先に述べた赤信号のシステムを活用することを提案する理由である。

少ない手間で短時間に大金を、というのが「よい」詐欺の条件である。詐欺で考えるから不謹慎な表現に見えるけれど、奇術におきかえてみれば、少ない手間で短時間に大きな喝采を、というのはとても理にかなった設定であることが理解できよう。

すなわち日々の生活でこの３つの条件を「赤信号」として、これらが見えたならば「一端立ち止まる」ように「みんなで」納得し、合意するのである。一端立ち止まって右を見て左を見てもう一度右を見て大丈夫であれば、そのとき初めて道路を渡ればよい。特に悪意がない状況でも、「すぐに」、「大金を」、「最寄りのATMから振り込ま」ないといけない事態は生じる。その場合でも「大金」だから、あるいは「大切なお金」だから、一端立ち止まって確認することを当然と考える、という合意をするのである。みんなでそれが当然と合意していれば、本人が気づいていなくても誰かが引き留める。協同作戦である。引き留められて気づいた段階で本人も確認が取れる。必要ならしかるべき機関に相談することもできる。その後、悪意のない場面であることがわかり、確認していた分「払い込み」が遅れたとしても、再び、みんなで確認が合意できていれば、その遅れは問題にならないであろう。遅れによる問題を不問に付すための「お墨付き」をしかるべき機関が出すことも有効である。要点は赤信号と同じく、立ち止まって大切な用事に遅れても仕方ない、とみんなで思えるまで浸透させることである。

その手法はまず先に述べた２種の条件付け

である。テレビやラジオにおいて日々視聴するCMが好例となる。さらに日常生活の構成期待にするためには、やはり「赤信号」の場合と同じく、保育園から街の公民館にわたる広範囲の教育活動が不可欠であろう。

構成期待とプライバシー・お節介

このように検討を進めると、逆にこの手法の弱点も見えてくる。すなわち協同させないために、話の内容を「私的」にでっち上げることが容易に予測できる。血相を変えてATMに駆け込んできた人に「立ち止まってみて」と声かけをしたときに「内輪の話だから」、「家族の恥だから」と切り替えされる場面である。

しかしこの場合でも先の赤信号システムは有効である。「事情はわからないけれど」、あるいは「事情はともかく」「一端立ち止まらせる」のが赤信号の特徴であった。ほどほどのお節介と言いうる。ともかく一応の用心と確認であり、その結果に対しては内輪や家族の中にも「赤信号なら仕方ない」と思えるまでに浸透させることが重要になる。

「少ない手間で短時間に大金を」という詐欺の本質はそれほど変わらないと思われるが、やはり表現は時々刻々変化するであろう。奇術と同じく詐欺についても新しいアイデアは限りなく出ると思わなければならない。協同作戦のためにメディアも活用した頻繁な広報活動が必要になる。奇術については「騙されない」ための協同作戦は誰もとろうとしないと思われるが、詐欺については、交通事故に対すると同じく、協同作戦は可能だと考える。根絶は不可能だが減らすことはできよう。逆に協同作戦をとらなければ、どんどん増加することも予測できる。「そんな目に遭いたくない」という思いを共有するところからぜひはじめたい。

引用文献

Garfinkel, H. (1963) A conception of, and Experiments with, "Trust" as a Condition of Stable Concerted Actions. In O. J. Harvey (ed.) *Motivation and Social Interaction: Cognitive Determinants*. Ronald Press, New York, pp. 187-238.

Kanizsa, G. (1976) Subjective contours. *Scientific American*, **241**, 66-87.

Köhler, W. (1917) *Intelligenzprüfungen an Menschenaffen*. Springer.

Milgram, S. (1972) The familiar stranger: An aspect of urban anonymity. *Division 8 Newsletter*, Division of Personality and Social Psychology, Washington: APA.

Pavlov, I. P. (1927) *Conditioned Reflexes: An Investigation of the Physiological Activity of the Cerebral Cortex*. Oxford University Press.

Sherif, M. (1935) A study of some social factors in perception. *Archives of Psychology*, No. **187**. Cited in M.Sherif & C.Sherif (1969) *Social Psychology*. Harper.

Shutz, A. (1945) On multiple realities. Philosophical and *Phenomenological Research*, **4**, 533-575.

Skinner, B. F. (1938) *The Behavior of Organisms: An Experimental Analysis*. Appleton-Century-Crofts.

Thorndike, E.L. (1911) *Animal Intelligence: Experimental Studies*. Macmillan.

付記

1. 筆者は平成23年秋、通称「オレオレ詐欺」などの防止に関して、島根県警察本部より「人はなぜ騙されるのか」という題名で講演を依頼された。本稿はその講演内容を修正、加筆したものである。貴重な機会を与えてい

ただいた島根県警察本部警視丸本到氏、糸川真司氏を初めとする関係者の方々にここに記して謝意を表する。本稿が関係各所のたゆまぬご尽力の一助となれば幸いである。また紀要への投稿を薦めていただいた竹永三男法文学部教授にも謝意を表する。